

## 大阪府立近つ飛鳥博物館 基本構想－抄－

1989年2月

### 建設の必要性

大阪の街が東京と決定的に違うところは、農耕文化がはじまって以降の歴史の重みの格差にある。ことに教科書にも登場し、ほとんどの人々に知られている「仁徳陵」古墳や「応神陵」古墳は、周知のように世界最大の規模を誇る墳墓であり、そこには当時の先端的な知識や技術が集約されている。これらの巨大古墳は「倭の五王」がはじめて、国際舞台にみずからの権威を誇示した記念的な造形物で、これらを欠落させると日本の歴史が空白になるほどのものである。

ところが大阪の場合、こうした歴史的にすぐれたモニュメントが、街のイメージや街づくりそのものに、ほとんどといってよいほど結びついていない。いわば「宝」のもちぐされといって過言でない状況にたちいたっている。その主たる原因は、文化財に関する情報提供が不足していることにあるのではないか。情報化しつつある現代社会において、歴史・文化情報の制御とその適切な提供のシステムは、大阪府においても強く望まれるところである。このような状況に鑑み、大阪の歴史・文化を理解・学習し、あわせて情報・研究センターとしての役割をもった歴史博物館を建設することが、いま急務といえよう。

さて近つ飛鳥とよばれる地域は、府下でも有数の歴史と文化がストックされているところである。二三の例を挙げてみると、4基の天皇陵古墳や聖徳太子墓古墳があつて「王陵の谷」とよばれる磯長谷（しながだに）、新しい構造の石棺式石室をもつた渡来的色彩の豊かな飛鳥官人の墳墓、前方後円墳・前方後方墳・双円墳あるいは大型方墳など多様な豪族の古墳、有力家族の共同墓地・一須賀（いちすか）古墳群、帯金具や墓誌をともなつた奈良時代の古墓、律令文化の華ひらく古代寺院、古代の官道・竹の内街道など、枚挙にいとまがない。

総じて渡来的色彩の濃厚なことが、近つ飛鳥における文化遺産の特徴をきわだたせる。いわば古代の国際交流が、古墳・寺院などに封じこめられている。そして7世紀代の支配者は、このような渡来文化・渡来人をくみこんで古代国家を形成していったのである。つまり日本古代国家－律令国家形成のプロセスが、近つ飛鳥のモニュメントに姿を変えていまに遺っている。

このような変化に満ちた文化遺産のおりなす歴史的世界が近つ飛鳥なのである。そして幸いなことに、古代からの限りない情報を秘めた文化財が、緑あふれる自然環境のなかで、ほどよい調和をたもちながら現代にまで遺されている。あたかも地域全体が「歴史博物館」

の様相を呈しているのであって、飛鳥・白鳳時代の歴史的雰囲気に入り、古代のロマンに想いをはせる場、あるいは歴史・文化を実感する体験学習の場、さらには地域的有為性をふまえた生涯学習の場に、このうえなくふさわしい。

こうした歴史的有為性に満ちあふれた近つ飛鳥の地に、歴史博物館を建設し、さきに開園した「近つ飛鳥風土記の丘」とあいまって、歴史と文化のストックを活かした街づくりの拠点的文化施設としていくなれば、それは南河内地域の活性化につながるとともに、大阪の都市アメニティの向上、さらにはゆとりのある人間環境の創造にとっても、大きく貢献していくことであろう。

## 目的

古代の国際交流をいまに伝え、日本古代国家の形成過程の解明に欠かすことのできない文化遺産、変化に満ちた多彩な古墳の宝庫－近つ飛鳥は、地域全体が遺跡博物館・野外博物館としての性格を有している。したがって近つ飛鳥博物館は、「近つ飛鳥」という固有名詞・地域性と、「古墳文化」の2枚看板をもつことが望ましい。この博物館の目的はつぎのとおりである。

1. 『大阪府総合計画』の「教育文化ゾーン」、ならびに『大阪府施策計画』の「歴史文化エリア」の中核的文化施設として、南河内地域の歴史・文化活動の発信源とする。すなわち、すぐれた文化遺産がひろがる近つ飛鳥地域の歴史と文化に触れ、学び、親しむための拠点－コミュニティ広場にしていく。また、生涯学習・学校教育の場としても活用できるようにする。
2. 近つ飛鳥地域の内外に埋もれたままの貴重な歴史・文化情報を、先端技術をはじめ多様な媒体を駆使し、府民に提供する。その中心には、楽しくわかりやすい展示を位置づけ、歴史に親しむ機会をつくる。
3. 近つ飛鳥地域は日本古代国家の形成過程の解明にとって、非常に重要な意味をもった地域である。

この地に遺された6・7世紀の文化遺産は、そうした歴史の証人だが、まだ十分な研究がおこなわれているとはいいがたい。そこで、この博物館では地の利を生かした研究－考古学・文献史学の共同研究など－を実施する必要がある。

いっぽう、近つ飛鳥の文化遺産は渡来的色彩がつよいことを前に述べたが、渡来人の古代国家成立史における役割をあきらかにするためには、内外の研究者の学術的交流が必要である。古代の国際交流の実態をときほぐしていく場として、この博物館を「内外に開かれた国際文化都市大阪」にふさわしい国際的な研究交流・情報交換の場として機能させる。

4. 南河内地域をはじめ、大阪府には全国でも有数の古墳が分布している。「景初（けいしょ）三年銘鏡」を出土したことで有名な和泉黄金塚（こがねづか）古墳、「倭の五王」の墳墓である古市古墳群や 百舌鳥古墳群、群集墳としては最大級の一須賀古墳群や平尾山古墳群などが陸続とつづく。ところがこれらに関する情報が、かならずしも利用しやすいかたちで整理されているわけではない。

したがって、府域の古墳に関する情報管理をおこない、研究者のみならずひろく府民が検索しやすい状態にしておく必要がある。いわばこの博物館に古墳文化の情報センターの役割をになわせる。

## 特色

<近つ飛鳥の歴史と文化のストックを活かしたふるさとづくり>の一翼をになう歴史博物館はいかにあるべきか。「博物館行き」ということばに象徴されるような陳列館的な、古色蒼然たるイメージの博物館であってはならない。府民が有効に活用でき、地域社会に密着した生きた博物館という特色を明確にうちだす。さらに、人のあつまる魅力ある博物館にするためにつぎのような特色をもたせる。

### 《コミュニティ広場として開かれた博物館》

近つ飛鳥の歴史と文化の理解をつうじて府民の知的交流をはかる。地域文化活動のひとつの拠点として、館の諸施設を開かれたものにしていくとともに、ロビーサービスの充実をはかる。ロビーには視聴覚装置による各種の情報提供をおこない、講座・講演・シンポジウム・映画・演劇・伝統芸能など多様なイベントの開催をつうじて、文化フォーラムとしての性格をもたせ、地域文化創造の拠点とする。

また、近つ飛鳥風土記の丘や「王陵の谷」の文化遺産を散策した人びとが、歴史的雰囲気のあるうちに、近つ飛鳥の歴史や文化について語りあう場としても有効に機能させる必要がある。

### 《生涯学習の機会の提供》

余暇の増加、高齢化社会の到来といった社会情勢の変化にとともない、生涯学習への意欲がいま沸々としてわきおこってきている。なかでもみずからの住む地域の歴史と文化に対する関心が高まりつつある。情報提供の充実や関連資料の整備、あるいは定期的な講座・講演の開催などをつうじてこうした要求に応えていかねばならない。

### 《学校教育の一環をになう博物館》

小・中学校の社会科のカリキュラムに博物館利用を組み込む。歴史を教科書の中だけではなく、身ぢかにあるものとして理解させ、地域のひいては大阪の歴史と文化に対する愛着心を養っていく。また、地域の歴史と文化に関する自主学習の場として機能させることによって、個性と創造性をのばす教育の推進にも役だてていく。

### 《体験学習による古代への参加》

土器・石器・木器づくりなどをはじめ、いろいろな古代の生活や技術などを実際に体験することによって、古代人の知恵や行動などを学び、幅広い感覚を函養させる。

### 《わかりやすい歴史と文化の展示、府民に親しまれ新しい大阪文化の創造につながる魅力ある展示》

考古資料、文献資料などの実物をはじめ、レプリカ、模型、グラフィックパネル、マルチビデオ、マルチスライド、コンピュータグラフィックス、ハイビジョンなど多様な資料とメディアを駆使し、カラフルで動きのある多角的な展示をおこない、近つ飛鳥を中心にした歴史と文化を楽しく学べるようにする。すなわち、従来の展示カラーを打ち破る新しい切り口にもとづいた展示にこころがける。また、府民の待望久しい「修羅」も展示する。

展示には常設展示と特別展示があるが、常設展示はつぎの2つのテーマを基本として展開する。

1. 近つ飛鳥と河内国
2. よみがえる文化遺産

### 《野外博物館的活動の実施》

近つ飛鳥地域の歴史的有為性を理解し、肌で感じてもらうためにも、時間をきめて、定期的に「王陵の谷」をはじめとした博物館周辺の文化財見学を開催し、学芸員が個々の文化財について解説する。そのことによって、野外の文化遺産と博物館の有機的一体性を深め、野外性をそなえた博物館という性格を明確に打ち出す。

### 《先端技術を装備する博物館》

さまざまな文化遺産を先端技術を使って新しく見せる。古いものを新しい切り口で見せることによって、従来にはなかったロマンを感じさせることができる。いいかえるならば、新しい展示手法、情報の収集・検索・サービスなどにおいて、最新の視聴覚技術を駆使するとともに、ロビー、ホール、セミナールームなどにおいても、さまざまな先端技術の活用をはかり、時代を先取りした博物館にしていく。

### 《研究センターとしての機能の充実》

唐を中心とし、高句麗・新羅・百済の3国をまきこんだ東アジアの政治的変動のなかで、日本古代国家が形成されていく。近つ飛鳥にはその歴史的モニュメントが密集しているが、難波津（なにわづ）と大和の飛鳥地城の中間に位置するという地理的環境もふくめた歴史的動向について、十分な研究がなされねばならない。

近つ飛鳥の文化遺産を通じての日本古代国家形成過程の解明には、東アジア史的な観点が必要不可欠であるので、国際的な学術交流を基本にすえた内外の研究者の共同研究が強く要請される。また、考古学のみならず、文献史学、地理学などの関連研究者の研究拠点にして

いくことも必要であろう。

#### 《情報センターとしての博物館》

近つ飛鳥の歴史と文化をはじめ、府下の古墳文化に関する情報の収集・加工・管理をおこない、府民や研究者の利用に供する。このようないわば専門的情報とは別に、学校での自主課題などにも呼応できるような、南河内地域の歴史全般についての間口の広い情報も提供していく。

いっぽう、他の文化施設や学術機関とのネットワークを形成し、こうした文化財をめぐる情報についてのセンター的機能をになっていく。またそれとともに内外の研究者が活用できるようなデータベースも計画的に作成していく。

#### 《近つ飛鳥風土記の丘との調和》

豊かな自然の中で文化財に親しむ場として、すでに開園されている「近つ飛鳥風土記の丘」との一体的活用をはかることが必要である。それとともに「近つ飛鳥風土記の丘」の景観をそこなうことなく、そのモニュメントとなるような博物館にする。